

『婆沙論』における無分別のとらえ方について

前田 英一

1. はじめに

玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』（以下『婆沙論』）では、入定中の意識は無分別なものと規定される一方で、初静慮までには言葉（vāc）があるとされている。デイグナーガ（ca. 480-540）の説を受け継いだダルマキールティ（ca. 600-660）は、言語と結びつく能力のある知を推理知に含め¹⁾、これを分別（kalpanā）であると明言している²⁾。ダルマキールティが説くように、言語と結びつきうる知が分別であるとするならば、無分別とされる入定中の知に言語知が存在することはないと考えられるかもしれない。しかし『婆沙論』においては、初静慮中にも言語があるという説が説かれている。つまり、初静慮における言語知を無分別なものとする考え方が、『婆沙論』には存在しているのである。

2. 『婆沙論』における無分別についての記述

玄奘訳『婆沙論』では、前五識と禅定中の意識は無分別とされ、定に入っていない意識は計度分別を伴っているので有分別であるとされている。ただし『阿毘曇毘婆沙論』（以下旧訳）と『鞞婆沙論』には、これに対応する文が欠けている。

問、此六識身幾有分別、幾無分別。答、前五識身唯無分別、第六識身或有分別、或無分別。且在定者皆無分別、不在定者容有分別。計度分別遍與不定意識俱故。此中、且説眼識後起分別意識。（『婆沙論』大正27, 374b5-9）

問う、此の六識身は幾ばくか有分別にして、幾ばくか無分別なるや。答う、前五識身は唯無分別のみにして、第六識身は或いは有分別、或いは無分別なり。且に定に在る者は皆無分別にして、定に在らざる者は有分別と容れるべし³⁾。計度分別は遍く不定の意識と

俱なるが故に。此の中、且に眼識の後に起こる分別意識を説くべし。

眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の前五識身は、無分別であるといっても自性分別を持つと、『婆沙論』では考えられている。

此中、略有三種分別。一自性分別、謂尋伺、二隨念分別、謂意識相応念、三推度分別、謂意地不定慧。欲界五識身唯一種自性分別。（『婆沙論』大正 27, 219b7-10, cf. 旧訳 大正 28, 169b5-8）

此の中、略して三種の分別有り。一に自性分別、謂く尋伺なり、二に隨念分別、謂く意識相応の念なり、三に推度分別、謂く意地不定の慧なり。欲界の五識身は唯一種自性分別のみ有り。

『俱舍論』界品の説明によると、前五識は計度分別（推度分別⁴⁾）と隨念分別の二つを持たないので、無分別であるとされる。

もし、五識身が有尋有伺であるならば、どうして無分別であると言われるのか。

計度〔分別〕と隨念分別としては、〔五識身は〕無分別である。（k. 33ab）

分別には三種類あるという。自性〔分別〕と、計度〔分別〕、そして隨念分別とである。すなわち、これら（五識身）には自性分別が存在する。〔しかし五識身には、〕別の〔計度分別と隨念分別の〕二つは存在しない。それ故に、〔五識身は〕無分別であると言われる⁵⁾。

3. 『婆沙論』における定

入定中の知は無分別であると、玄奘訳『婆沙論』では説かれている。『婆沙論』では、色界（四静慮）と無色界が定界であるとされ、欲界は定界ではないと説明されている。

欲界有二、謂聞所成慧思所成慧。色界有二、謂聞所成慧修所成慧。無色界唯有修所成慧。問、何故欲界無修所成慧耶。答、欲界是不定界、非修地、非離染地、……。問、何故色無色界無思所成慧耶。答、色無色界是定界、是修地、是離染地、……。……、聞所成慧在五地、謂欲界四静慮。

（『婆沙論』大正 27, 218a7-25, cf. 旧訳 大正 28, 168b15-28）

欲界に二有り、謂く聞所成の慧と思所成の慧となり。色界に二有り、謂く聞所成の慧と修所成の慧となり。無色界には唯修所成の慧のみ有り。問う、何故に欲界には修所成の慧無きや。答う、欲界は是れ不定界なり、修地にあらず、離染地にあらず、……。問う、何故に色・無色界には思所成の慧無きや。答う、色・無色界は是れ定界なり、是れ修地な

り、是れ離染地なり、……、……、聞所成の慧は五地に在り、謂く欲界と四静慮となり。初静慮以上から定であるとされているので、『婆沙論』では初静慮以上の知は無分別なものとして扱われていると考えられる。また、無分別である色界(四静慮)には思所成の慧は無いが、修所成の慧と聞所成の慧は存在するとされている。

4. 初静慮まで存在する言葉

『婆沙論』には、言葉が初静慮まで存在するという記述が散見される。以下に例を挙げてみよう。

復次、第二静慮滅語言本。語言本者、謂尋與伺。如契經說、要尋伺已能発語言、非不尋伺。第二静慮尋伺已滅、無語言本故、説定生(『婆沙論』大正27, 416b3-6⁶⁾。

復た次に、第二静慮は語言の本を滅す。語言の本とは、謂く尋と伺となり。契經に説くが如し、要す尋伺し已りて能く語言を発し、尋伺せざるにはあらずと⁷⁾。第二静慮は尋伺已に滅し、語言の本無きが故に、定生と説くなり。

この文章において『婆沙論』の作者は、尋と伺を語言の本であると述べ、尋と伺がはたらくと必ず言葉が発せられるという契經を引用している。初静慮には尋と伺が存在するので言葉が発せられ、第二静慮では尋と伺が滅しているので、言葉が発せられることはないと考えられているようである⁸⁾。

また、不動法阿羅漢が得るとされる四無礙解の説明の中にも、初静慮に言語が存在するという記述がある。

詞無礙解云何。謂、於言詞不退転智。弁無礙解云何。謂、於無滯応理説、及自在定慧中不退転智。……。義弁二無礙解有漏者、在十一地。謂、欲界未至静慮中間四静慮四無色。無漏者、在九地。謂、未至静慮中間四静慮三無色。詞無礙解在二地。謂、欲界初静慮。(『婆沙論』大正27, 904a11-b2)

詞無礙解とは云何ん。謂く、言詞に於ける不退転の智なり。弁無礙解とは云何ん。謂く、無滯に理に應じて説き、及び自在なる定と慧との中に於ける不退転の智なり。……。義と弁の二無礙解の有漏なるは、十一地に在り。謂く、欲界・未至・静慮中間・四静慮・四無色なり。無漏なるは、九地に在り。謂く、未至・静慮中間・四静慮・三無色なり。詞無礙解は二地に在り。謂く、欲界と初静慮なり。

詞無礙解とは言葉に対する不退転の知であり、弁無礙解とは、主に法を滞り無く説いたりする不退転の知であるとされる。そして『婆沙論』の作者は、詞無礙解は欲界と初静慮に存在すると主張している。

この説は、『俱舍論』の智品の記述においても示されている。

言葉に対して [の無礙解] は、欲 [界] と初 [静慮] の二つにある。(k. 40b)

言葉は、詞 (nirukti) と同じ意味である。詞無礙解は、欲界と初静慮地に属している。上 [の地] には、尋が存在しないので⁹⁾。

『俱舍論』には、詞無礙解が欲界と初静慮より上の地に存在しない理由として、第二静慮以上には尋が存在しないことが挙げられている。

5. まとめ

玄奘訳『婆沙論』では、定にある意識は無分別であると規定されている。『婆沙論』において定と言われるものは初静慮以上の定であるが、この初静慮まで言語が存在するという説が、『婆沙論』では説かれている。このことから、初静慮における言語知は無分別なものであるという考え方が、『婆沙論』には存在しているといえよう。またこの小論では、『俱舍論』で言うところの定静慮に相当する初静慮についての議論のみを検討したのであるが、生静慮に相当する初静慮の議論も『婆沙論』ではなされている。これらの点については、別稿で論じたい。

略語表

AKBh : *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, ed. Pradhan, Patna, 1967

MN : *Majjhimanikāya*, I, ed. V. Trenckner, Pali Text Society, 1979

NB : *Nyāyabindu, buddijskij uchebnik logiki sochinenie Darmakirti i tolkovanie na nego Nyāyabindu-ka sochinenie Darmottary, sanskritskij tekst izdal s vvedeniem i primiechani lami*, ed. F. I. Shcherbatskoj, Bibliotheca Buddhica VII, Petrograd 1918; repr. Osnabrück, 1970.

SN : *Samyuttanikāya*, I, IV, ed. M. Leon Feer, Pali Text Society, 1973

Hattori 1968: *Dignāga, On Perception, being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramāṇasamuccaya from the Sanskrit fragments and the Tibetan versions*, translated and annotated by MASAAKI HATTORI, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1968

- 1) 言語知を推理知に含める考え方の萌芽は、すでに『婆沙論』に見られる。拙稿『『婆沙論』における正しい認識の根拠について』（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四七輯 第一分冊 2002年）参照。
- 2) NB I, 5 : abhilāpasamārgayogyapratibhāsapratitiḥ kalpanā (言葉と結びつく能力のある顕現を持つ知が、分別である)。この偈文の英訳については、Hattori 1968 p. 85, 12ff. を参照。

- 3) Cf. 『阿毘曇甘露味論』大正 28, 969a17-b2 : 云何が識陰なるや. 青・黄・赤・白等の諸法を分別する識なり. 是の識に六種有り, 眼識・耳 [識]・鼻 [識]・舌 [識]・身 [識]・意識なり. …… 五識は分別すること能わず, 意識は分別す (云何識陰, 青黄赤白等諸法分別識. 是識有六種, 眼識耳鼻舌身意識. …… 五識不能分別, 意識分別).
- 4) 『婆沙論』で説かれている計度分別と推度分別は、『俱舍論』で説かれている計度分別と同じものであると考えられる. 例えば, 普光の『俱舍論記』に記されている割り注には, 「婆沙の文に准ずるに, …… 計度と推度とは名は異なるも義は同じなり (准婆沙文, …… 計度推度名異義同)」(大正 41, 39a1) とある.
- 5) *yadi pañca vijñānakāyāḥ savitarkāḥ savicārāḥ katham avikalpakā ity ucyante. nirūpañānusmarāṇavikalpenāvikalpakāḥ/ (k. 33ab) trividhaḥ kila vikalpaḥ svabhāvābhinirūpañānusmarāṇavikalpaḥ tad eṣāṃ svabhāvavikalpo 'sti. netarau. tasmād avikalpakā ity ucyante*(AKBh p. 22, 18-21). この部分の日本語訳としては、『俱舍論の研究 界・根品』(櫻部建著 法蔵館 1969年) pp. 199-200を参照.
- 6) Cf. 旧訳 大正 28, 312b20-22 : 復次, 以第二禪滅声根本. 声根本者, 是覺觀. 如説, 有覺觀者, 能出語声, 非無覺觀. 第二禪中, 無有是事, 『鞞婆沙論』大正 28, 488c28-489a1 : 或曰, 謂二禪離声根本. 声根本者, 是有覺有觀. 如所説, 居士覺觀已然後言説. 謂二禪離声根本以故爾, 『集異門足論』大正 26, 379b13-16 : 語行云何. 答語亦名語行, 語業亦名語行, 尋伺亦名語行. 於此義中意, 説尋伺語行. 所以者何. 要尋伺已能發語言, 非無尋伺. 是故, 尋伺説為語行.
- 7) Cf. AKBh p. 61, 5-6 : *vāksaṃskārā vitarkavicārāḥ sūtra uktāḥ. vitarkya vicārya vācam bhāṣate nāvitarkyāvicāryeti* (『俱舍論』大正 29, 21b27-29, 『俱舍釈論』大正 29, 180b16-17) . Cf. MN I , p. 301, 26-28, SN IV p. 293, 25-26 : *vitakketvā vicāretvā pacchā vācam bhindati, tasmā vitakkavicārā vacisaṅkhāro*. Cf. 『雜阿含經』大正 2, 150a24-29 : 有覺有觀を名づけて口行と為し, …… 有覺有觀なるが故に則ち口語す. 是るが故に, 有覺有觀は是れ口行なり (有覺有觀名為口行, …… 有覺有觀故則口語. 是故, 有覺有觀是口行).
- 8) 尋伺の基本的性格については, 水野弘元『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』(山喜房仏書林 1964年) pp. 433-453 参照. また, 尋伺から言葉が発生する過程については, 横山紘一「仏教の言語観 (一) ~ (二)」(国訳一切経印度撰述部・月報『三蔵』107・108, 1975年 11月・12月) 参照.
- 9) *vāci prathamakāmayoḥ/ (k. 40b) vān niruktir ity eko 'rthaḥ niruktipratisaṃvit kāmādhātuprathamādhyanābhūmikā ūrdhvaṃ vitarkābhāvāt* (AKBh p. 419, 15-17). この部分の日本語訳としては、『俱舍論の原典研究 智品・定品』(櫻部建・小谷信千代・本庄良文著 大蔵出版 2004年) pp. 155-156を参照.

〈キーワード〉 婆沙論, 無分別, 語言, 定

(早稲田大学助手)

ements (*dhammā*), He realizes the Law (*dhamma*, Truth) which accompanies the causes and conditions of human existence and He knows the cessation of these causes and conditions as well. These elements (*dhammā*) may mean the elements (*aṅga*) of dependent origination, or 5 aggregates and 6 (or 12) spheres of perception and cognition, etc., which exist when the causes and conditions exist, and which cease to exist when these causes and conditions cease to exist, according to the Law of dependent origination.

68. Views on the Four Noble Truths in Mahāyāna Buddhism: Sūtra texts quoted in the Āryasatya-parīkṣā Chapter of the *Prajñāpradīpa*

Kōichi FURUSAKA

On the 24th Chapter of the *Mūlamadhyamaka-kārikā*, the *Prajñāpradīpa* of Bhā(va)viveka quotes a sūtra with regard to the Four Noble Truths.

The sūtra states, “Mañjuśrī, whoever sees that all things (dharmas) do not arise knows thoroughly Affliction. Whoever sees that all things do not stop abandons the Origin (of Affliction). Whoever sees that all things are Nirvāṇa in the end realizes the Appeasement. Mañjuśrī, whoever sees that all things have no effecting effects the Way.”

In regard of this sūtra, the *Prajñāpradīpaṭīkā* of Avalokitavrata comments that the sūtra is quoted in order to give the authority which is well known in Mahāyāna, and such a view is expounded in the *'Phags pa ye shes gsang ba bsgoms du bcug pa'i mdo*.

That sūtra text nearly coincides with the *Arya-mañjuśrī-paripṛcchā* quoted in the *Prasannapadā*. But those texts are also found in some sūtras of the same class, such as the *Bodhipakṣanirdeśa* (T. 472) and *Viśeṣacintibrahmaparipṛcchā* (T. 587).

The views on the Four Noble Truths of these sūtras correspond to the Sāṃketika-paramārtha-satya.

69. On *Nirvikalpa* in the *Abhidharma Mahāvibhāṣā*

Hidekazu MAEDA

There is the statement in the *Abhidharma Mahāvibhāṣā* (AMBh) translated by Xuanzang 玄奘 that discrimination in meditation is devoid of conceptual construction (*nirvikalpaka*), but that language exists until the first stage of meditation (*prathamadyāna*). Dharmakīrti (ca.600-660) calls cognition (*jñāna*) that can combine with language conceptual construction (*kalpanājñāna*). This may be understood to mean that there is no language in meditation. On the contrary, it is said that language exists until the first stage of meditation in the AMBh. The authors of the AMBh regard cognition that is combined with language in the first stage of meditation as non-discriminative (*nirvikalpaka*), because they say that discrimination in meditation is devoid of conceptual construction.

70. The Meaning of *Jāla-hatthapāda*: The Difference between the Southern and Northern Traditions

Karen KASTUMOTO

Jāla-hatthapāda is one of the thirty-two characteristics of a great man like the Buddha. In Northern Buddhism, it implies that He had membranes/webs between the digits of His hands and feet.

However, Buddhaghosa's commentaries refute this idea. Buddhaghosa argues that under the rule of the *Vinaya*, such a man cannot become even a monk. Moreover, the commentaries explain that the lines formed by the digits and their knots in the great man appear like nets.

Some scholars argued this matter and concluded that the idea of webbed digits emanated from a misinterpretation of the sculptures of the Buddha, whose digits were connected by sculptors to prevent them from fracturing.

In this paper, I attempt to demonstrate that the idea of webbed digits originates from the Sarvāstivāda school. The evidence is as follows. The word "*haṃsa-rāja*" (the king of ganders) appears as a simile of *jālinī-pāṇipāda* (= *jāla-hatthapāda*) in a Sanskrit scripture, namely, the *Mahāvadana-sūtra*, and in the Chinese versions of other sutras; all of these were disseminated by the same school. Moreover, I found pictures of two sculptures with webbed dig-